

水上勉
戲曲集

中央公論社

水上勉
戲曲集

中央公論社

水上勉戯曲集

定価一八〇〇円

昭和五十五年十二月十五日印刷
昭和五十五年十二月二十五日発行

著者 水上 勉

発行者 高梨 茂

印刷者 青木 勇

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七

振替東京二二三四

検印廃止

©一九八〇

水上勉戯曲集 目次

雁の寺

3

飢餓海峡

69

越前竹人形

147

越後つっいし親不知

207

はなれ瞽女おりん

251

五番町夕霧楼

315

冬の柩——古河力作の生涯

393

装
幀

菊
池

薰

雁
の
寺

〈登場人物〉

桐原里子

慈念

慈海（孤峯庵住職）

雪洲（源光院住職）

あき子（その妻）

徳全（雪洲の徒弟）

蓮沼良典（般若林中学の教師）

木田黙堂（若狭西安寺の住職）

海翁（万年山燈全寺派の長老）

集英（同派の僧）

久間平吉（塗装屋の職人）

とみ（その妻）

久間伝三郎（その親族）

「川しげ」の丁稚

九条薬局の丁稚

桐原惣助（里子の父）

きん（里子の母）

加奈江（里子の妹）

他に、僧侶たち、久間家の親族
たち、瞽女たち、村の男女たち

声

一人の瞽女

序景 破れ堂

音楽。

荒涼たる冬の野に、破れ堂が一つ。うす明りの中に立っている。

堂内外にうずくまる贅女ごぎよのむれ。炉火が燃えたすと、しだいに、めくら女の凄惨な顔が、能面のようにうごきはじめる。

声

越前、越後の村々を物乞いして歩きまするめくら女のことを、贅女と申します。三、四人連れをなしまして、下げ髪はまだ年端もゆかぬ眼あき娘に手びきさせ、娘のさし出す竹ざおにすがって、家々の門口に立ちますると、文弥節、説教節、あるときは「葛の葉の子別れ」などと申す段物を、三味にあわせて歌うのでござりました。

舞台全面に雪が降ってくる。炉火はますます赤

くなり、遠くから贅女うたが音楽にのってきこえてくる。

声

いつの世からめくらはめくらのつどいができましたものやら。生れ落ちたその日から、この世の姿を見たこともない、かたわ乳呑み子を、野道に捨てる親もあつたとみえます。子は拾われて、贅女屋敷と申すめくら館きんに預けられ、三味線、歌を習なうて、成人いたします。生みの母を見たこともないめくらが、めくらの子を育てるのでござりまする故、子もまた、育ての母がめくらであることも見えませぬ。

音楽は和讃調に変わり、雪は小やみとなり、堂内の弥陀の像に光りがあてられる。木像の弥陀の慈悲ぶかい相がうきたってみえと、和讃は高まる。

声

めくら女とて、女にかわりはござりませぬ。年ごろともなりますれば男の欲しい夜さりもござりました。心なき村男にだまされて、一夜のもてあそびに、軀の燃えを覚え、子を妊むこともござります。贅女にはきつい掟がござりまして、妊み女は仲間はずれといたし、手びきの竿につかまるこ

ともゆるされず、孤独の闇に取りのこされて生きるのをござります。

冬がくると瞽女がくる。村人は、めくらの歌がきこえてまいりますと、米、あずき、餅などくれてやろうと門口に迎えます。雪に閉ざされた村の暦の中を、瞽女はあたたかく生きたのをござりました。

音楽は高まり、雪は降ってくる。と、そこに、いつからか、村の衆、僧、子供らが立っていて、瞽女のむれと共にうごきだすのである。凍えた冬の、人間たちの連帯が、絵のようにかぶるのだ。

第一場へ舞台は廻ってゆく。

第一場 孤峯庵本堂の内陣の間

孤峯庵本堂の内陣の間。金泥の襖に雁がえがかれてある。雁は、十数羽いる。松が池畔を這い、

雁はコブのような松の根にとまっているものもある。一羽の母雁が雛雁に餌をやっている図もある。これらの雁の絵は、照明の研究によって、あるいは黄昏の雁ともなり、朝の雁ともなり、あるいは、灰いろに死んだ雁のイメージをもつように工夫されている。

正面には、釈迦牟尼世尊像があり、須弥壇がある。

序景の瞽女の合唱音が、舞台の廻転につれて、読経に変わり、テーマ音楽が、経文になりかわるのである。

明りが入ると、両側に、十二名の和尚が袈裟をかけて並び、中央の曲糸に住職慈海がいる。その前に九拝する慈念。頭はつるつるに剃られ、白衣の上の新装の衣はまばゆい。晴れの得度式が行われているのだ。お経がすむと、慈海が、曲糸から降りて、慈念の手をひいて正面へくる。

源光和尚雪洲、徳全、蓮沼良典もいる。

慈海 今日からは、お前さんは仏の門に入った、仏

の弟子になった……出家したんや。家を出るといふことは、若狭のお父さんやお母さんに別れを告げることやど。仏の門に入れば、親も子もない、

すべてが平等性智一切衆生。修行をつんで、上求菩提、下化衆生の道を歩かにならん。さ、こっちや。在所の若狭を拝めや。北山の向うにある、お父さん、お母さんに九拝しなされ。

慈念、黙したまま、動かない。僧侶たち、ざわつく。

雪洲 きみ……いや、慈念君……在所への別れやがな。

慈海 九拝を教えたやろ……座具をとりなされ……慈念……

慈念、むっとして不動。徳全、おろおろする。

慈海 慈念！

慈念 わい……わいには……。

といって、じっとしている。僧侶たち、困った顔。

雪洲 若狭はきみ……こっちやろ、慈海和尚。北西のはずやが。

と、慈海の指した方向とはちがう方角を指す。

慈念 ……和尚さん……。わいには、お父うもおつ母アもあらへん。別れを告げんならん人はおらん。僧たち、またがやがやる。

慈海（困った顔で）そんなことはなかるが。お前を育ててくれた角さんやおかんのおりなさる若狭やな。そのおふたりに別れを告げなさい。

慈念 ……はい。

座具を腕よりはずして、しおしぶ九拝をつづける。九拝が終る頃に、慈海、曲衆にもどる。

慈念、慈海の前にて合掌。

声 今日より汝仏門に入つて、名を慈念とあらたむ。山城州万年山燈全寺塔頭孤峯庵主慈海大猷首座の弟子となり、誓願一乗の道を歩まんことを誓う。昭和八年三月七日。

読經の聲が再びおこる。僧たち、列を輪にして、

慈念、慈海を一周して、上手の廊下へ消える。

そのあとに慈念、慈海がつづく。

間——奥から僧たちの笑聲。衣をぬいで白衣だけになった慈念が、やがて、上手から走ってきて、雁の絵を一羽ずつ丹念に見て歩く。母子雁の前にて、立ちつくす。

——暗転——

第二場 孤峯庵隠寮と本堂

庫裡の慈海の部屋。便所、浴室の入口が下手にみえて、汲取り口が正面をむいている。縁の下がみえる。隠寮の部屋の床に掛軸、「本来無一物」と書かれてある。上手に玄關、本堂へと続く廊下。幕あくと、慈念が肥えを汲んでいる。天秤棒で二つ桶をかつごととするが、背がひくいので、桶がゆれて地につきそうになる。へたばる。慈海、それを見ている。いらいらして、

慈海 阿呆やなア……何んべんいうたらわかるねや
……紐がながい、紐がながい。

慈念 へえ。

脅えつつ、天秤棒に肥桶の紐をまきつけて短くする。そうして、かつぎあげようとするが、やはり重い。

慈海 もっと、桶をからだにひきつけい。抱くように

に……そう、もっとひきつけるんや。

慈念 へえ。

桶が汚ないので、少しはばをせばめただけでかつぎ直すが、しぶしぶである。慈海、下駄をつかけて、出てくる。

慈海 馬鹿者ッ、なぜ、わしのいうことをきかん。

この桶が汚ないのか。汚ないのならなぜ、外側をきれいに洗うておかん。すんだ時によく洗っておけば、匂いはせん。汚ないものをいやや、いややと逃げておるから、いつまでも汚ない。逃げるからひつついてきよる。紐を短こうして、桶へ手をかけてみいッ。

慈念、手を肥桶にかけるが、すぐ移す。慈海、怒って、うしろ手を桶へかけさせる。

慈海 かついでみい。

慈念 ……へえ。

慈海 かるうなつたやろな。

慈念 はい、かるうなりました。

慈海 歩いてみい……。

慈念、よろけて歩けぬ。慈海、いらいらする。

と、この時、玄關の魚板が鳴る。

慈海 あ、はえ。

荒っぽい返事をしておく。が、また魚板が鳴る。

めんどくさそうにまた返事。

慈海 大事な杉苔の庭へこぼすんじゃないぞ。肥え

をこぼすと、苔が枯れよるで。早よゆけ……。

慈念、紐をなおしている。慈海、わきの石灰粉

を汲取り口にかける。

また魚板が鳴っている。

慈海 どうれ……。

めんどくさそうに玄關へと廊下を去る。

里子上手庭先に登場。美貌である。無教養なところがあるが、観音のように美しい一瞬がある。

里子 ごめんやしておくれやす。

慈海 ……………。(もどってくる)

里子 いくら叩いても返事がおへんさかい……。

慈海 こら、こら、めずらしい、よう来ておくれた

……あんたが、南嶽さんの葬式にも四十九日にも

顔を見せんで、どうしてござるやろと気にしよった

んじやが……よう来てくれた……こら珍客や。

まあ、あがりなはれ。

慈海、部屋にきて、座蒲団をすすめると、里子、

部屋へ上り、元芸妓であった感じをだして、座

蒲団をわきへよけて坐る。独り暮らしの禅坊主の

きたない部屋を強調すること。

里子 (あらたまつて)和尚さん、ながいことご無沙

汰いたしました。あの人の生前には、いろいろと、

お世話さまになりました……和尚さんも、お元氣

でなによりでございます。

慈海 えらいあらたまつたあいさつで……さ、さ、

敷きなされ。

里子 ほな。葬式にかて、法事にかて、来たい心は

やまやまどっしや、そやけど、和尚さん、秀子は

んの眼が恐ろしゅうて……来れますかいな。ほと

ぼりがさめてから、和尚さんにたのんで、せめて

お位牌にだけでも、まいらせてもらお思うて、

……今日まで辛抱してきましたんどっせ。

慈海 一つおいでるやろとわしも心待ちしとった

……ここは、あんたには思い出のある寺やで……。

里子 へえ、そらそうどす。

里子、縁へ立つ。

肥えを汲み終って、紐を短くしている慈念が、

その里子をみて、果然とする。

実母の贅女のお菊に似ているからだ。

里子 (それに気づかない) へえ……このお庭も、ちい

ともかわらしまへんな。あすこのグミの実を、うちが仰山とって先生にあげた日のこと思ひだしますわ。あ、あすこに枇杷もおすやおへんか。いちじくも、ザクロも。みんなそのままや。

慈海 なんも交つとりやせん。孤峯庵の裏庭は、南嶽も好きやった。あれは、南天やら万両を、よう写生しよった……。

里子 (慈念に気づくが、しかし、寺男でも働いていると思いきめて) うちら、和尚さん、ここに何年いましたやろ。

慈海 フランスの博覧会に出品する時は一年もかかったしなア。……それから、日展たんびに本堂をアトリエにしてたさかい、五年はいたやろ。……それが、なんと……ぼっくり逝ってしまひよって……阿呆な奴や。あんたのような別嬪をこの世にのこしてなア、もったいない。

里子 和尚さん……本堂の雁の襖の絵をみせとくれやすか。

慈海 ああ……みせたげるで……雁の絵は南嶽の自慢の絵やった。あいつはアトリエの家賃を払うかわりに、あの襖を描いてくれた。出来あがるとよ

ほど氣に入つたとみえて、洛北に名物が一つ出来よった、ここは雁の寺や、といひよった。

里子 ほな、うち、お茶よばれる前に、お位牌におまいりしたいし、なつかし雁の絵もみせとくれやす。

慈海 ……ゆこか。

と、立ちあがる。慈念の姿をみとめて、

慈海 慈念……。

慈念 へえ。

慈海 手洗うて……はよあがれ……きょうはお客さんや……薬石を進ぜることにするで、畑へいって、ちしやの葉をばちいてこいッ。肥えのかかつたところはよう洗うんやど。それでしたしをつくれやア……。

慈念 へえ。

慈海 早よせい……肥桶は洗わんでよい。台所を先にせい。

慈念 はい。

上手の庭へ去る。里子、見送って、

里子 ……小僧はんいやりましたんか。

慈海 ああ、若狭からこんどきよったんや。

里子 和尚さんの後を継がはる小僧さんどすのんか。

慈海 修行次第ではな、後を継いでくれる子にもなれるが、泣きべそかきよる子であかんわ。ほな、本堂へゆこ。

と、里子をつれて本堂へ続く廊下を去る。慈念、出てきて見送る。

舞台は廻り、本堂が現れる。襖絵が絢爛と輝き、正面に釈迦牟尼世尊像が端麗である。慈悲ぶかい眼ざしで、あたかも、描かれてある雁の一羽一羽を慈しむかのように見ている。

里子 ああ……なつかし……。あの人、これがうちで、これがあの人やといわはった……。

里子、雁の一羽一羽にさわるように、踞んで涙ぐむ。

里子 あの人、ここに生きてはるようどすなァ、雁が一羽一羽生きてて、うごいてますわ。和尚さん……。

慈海、須弥壇の奥へまわりこんで、南嶽の位牌を出してきて、正面壇の上に置く。里子、ハンケチで眼頭おさえて合掌。

慈海 秀嶽院南燈一見居士……南無阿弥陀仏、南無

阿弥陀仏。

照明が急に襖絵を灰いろにする。

音楽おこる。

雁のむれが羽ばたきはじめる。

慈海 南嶽は……この寺が好きやった。自分の家より、この寺におる方が心やすまるいいよった

……それは……里子はん、あんたがここにいたからや。

里子 ……………。

慈海 丸太町におると絵が描けんいうて、寺へきたら傑作が描けよった……この雁の絵がすばらしいのも、あの男の魂がのりうつとるからや。里子はん、いま、あんたは、その雁が自分で、こっちが南嶽やというたが……あるいは、これはわしかもしれんぞ……、（と、一羽を指さし）これが、夫人の秀子はんやもしれんなァ……。南嶽という男は、人間に興味をもつてよった。とりわけ女にのう。女ごが好きで好きで……ずいぶん、わしとも、芸妓買いもした、女郎買いもした。……その南嶽が……一枚も女を描かなんだ。……里子はん。あれは死ぬまで鳥ばっかり描いた。南嶽は、じつは鳥

を描いて人間を描いておったんや。あんたがいま……生きてるようやというたが、……そのとおり、みんな……羽音をたててうごくようやろ……。

里子 ほんまに……。

慈海 あんた……それでいま、出町におるんか。

里子へえ……死んでしまわはったら、月のお手当てでももらえしまへんやろ。それに、秀子はんには憎まれてましたさかいに……忌明けにも、茶掛の一本もろてしまへん。なんぞして収入を得んならんとするて……祇園へまた戻ろか思いましたけど……親切にしてくれはった「松八重」のお婆ちゃんも去年死なりましたしなア……泣きついてくともあらしまへんねん。……それに、若い妓オがもう羽ぶりきかしてはるとこへ、うちらみたいなもんが戻ったかて……苦労どすしなア……。

慈海 それで、あんた……いま、なんもせんと、出町のあの家に間借りしとるんかいな。

里子へえ……。

慈海 そら、困ったこっちゃな……里子はん……じつは、わしは、南嶽が死ぬる二日前に丸太町の家へ行った……その時、南嶽はまんだ、眼はようみ

えた。わしがゆくと、弟子の南窓やら、家の者を遠ざけて、小っちゃい声でなア、和尚さん、里をたのんます、あれは、孤峯庵の娘^おや、和尚さん、よろしゅうたのむで……こないいうて……にっこりわらいよった……。

雁が羽ばたく。また、音楽がおこって、ゲア、ゲアと雁の啼くような遠い声がする。

慈海 あんたも、わしと南嶽の仲はよう知っておったやろ。わしの禪まで間違えてしよった仲や。おまはん、……おぼえとるか。おまはんは南嶽が一つ床で寝とって、わしが枕もとへよって、おまはんの手^エにさわったら、おまはん、いやらし、和尚さん、耳の毛^エ剃つとくれやす……耳の毛^エ剃ったらキスしたげますいうた……。

里子 そんなてんごばかりいうて、じゃらけた夜さりもおしたなア。

里子、立ち去りがたく、襖絵にまだみとれてい

慈海 この寺におりさえすれば、いつでも、南嶽の絵はみておれる……おまはんの恋人は、ここに眠ってるのやさかい。どや……こんばんは薬湯を進

ぜるで、……久しぶりに呑んで、南嶽の霊をよびもどしてやる。さあ、ゆこ……。

里子 和尚さん、あの人は、ここで、雁をみて、ひとり淋しゅう……眠ってはりますねんやなッ。

慈海 そうや、そうやで。さ、ゆこ。南嶽は、あんたを愛してよった……あんたとここに同棲した日々が、あの男の一ばん輝いた日やった。

慈海、あるき出す。里子、ついて前面へ出る。うしろで舞台は廻りはじめる。隠寮があらわれる。

隠寮に舞台はまわり終ると、明るくなり、すでに正面に箱膳が二つ用意され、徳利もせてある。

芸妓ぶりで呑んでいる里子。

里子 おいしいわ。出町でひとりですてますさかい、お酒いただいたことなんぞあらしまへんねや。お腹へじいーんと……沁みてくるようやわッ……。

慈海 そら結構。だれに遠慮もいらん。南嶽がそこにおると思うて、ぎょうさん呑んどくれ……。

皿のものに箸をつける。舌打ちして、べっとそれを吐き出す慈海。里子、びっくりする。

慈海 慈念ッ。

遠くで、「はいッ」ときこえる。やがて、すり足で上手よりきて、障子をあける。

慈海 馬鹿者めッ、また、こんなもんに、砂糖入れくさるッ、あれはどういうたに……つくりなおせッ。

慈念 はい……。 (行こうとする)

慈海 お客はんのを持って行きなさい。

里子 うちのはかまへんわ。

慈海 いや渡して下さい。阿呆が……あんだけいっても、料理のコツをおぼえよらん。菜ッ葉は菜ッ葉……芋は芋で、自然の甘味というものをもっておる。それをひきだしてみせるのが料理。こってり砂糖を入れくさって……ごまかしよる。

里子 きつい叱りようや……甘うておいしいやおへんか、和尚さん。……かしこい小僧はんやのに。いくつえ。

慈海 十四や。

里子 まだ、十四イやそらの子供に、思いどおりの味つけが出けますかいな。かわいそうやわ。学校は？

慈海 大徳寺の般若林へ今年入った……さ、一杯ッ

ごう……。在家一般の子育て法で禪宗坊主が育つ
もんじゃないねんや。さ、あついと一杯……。

料理を習うなかにも人間をつくりあげる修行がひ
そませてある。偽の甘味に舌つづみを打つような
くせをつけると、真物の甘味を見失うてしまう人
間になる。修行の道はきびしいノ

里子 へえ、けど、うちらには、かわいそうに思え
るわ……。あんなきつう叱らはって。ひるは肥え持
ちまでさしてはったやおへんか。

慈海 わしかて、お前、小さい頃は肥え持ちもした
り、草取りもしたぞ。

里子和尚さんも、しやりましたんか。うそみた
い。

慈海 わしの顔のどこに、嘘とかいたる……禪宗坊
主いものは、雲水になるまでは、毎日が修行な
んや。

里子 へえ、そうですか。

慈海 ちょっとごめんやす。

慈海、立って小用にゆく。電気がつくので小窓
でそれがわかる。そこへ慈念が徳利と皿をもっ
て現れる。

慈念 入ってもよろしですか。

里子 はい。

慈念、皿を二つ卓の上に置いて、新しい徳利一
本もそこへおく。

里子 あんた……若狭のお子やてなア。(質問的にい
わず、心理的な芝居である)

慈念 へえ。

里子 お母はん、お父はんは？

慈念 ……………。

里子 お父はん、なにしておいでやすの？……いや
はんのどすやろ？

慈海の咳ばらいの音がする。慈念、脅えて立つ。

里子 かめへん。ここにすわって、お話きかしとく
れやす。お父さん……何しておいでやすの。

慈念 ……だ、だ、大工。

慈海 慈念、手洗の水が切れとるぞッ。

慈念 はい。

走り出て台所へ去る。慈海、入ってくる。

里子 あんな小っちゃい子オを、お寺はんへ出さは
る親の顔がみてみたいわ。

慈海 近頃は、農村も窮乏しよって、娘らが女郎に